

# 医療薬学フォーラム2014

## 第22回クリニカルファーマシーシンポジウム

慶應義塾大学

薬学部長 望月 眞弓

### ●テーマは「トランスレーショナルリサーチ」●

来る6月28日、29日の2日間にわたり「医療薬学フォーラム2014/第22回クリニカルファーマシーシンポジウム」を開催します。場所は東京都江東区有明、通称、お台場のビッグサイトTFTホール（東京都江東区有明）です。私は、実行委員長を拝命した慶應義塾大学薬学部・望月眞弓です。本日は、「医療薬学フォーラム2014」の主な講演やシンポジウムをご紹介します。

医療薬学フォーラムは日本薬学会医療薬科学部会が主催し、病院、薬局、製薬企業、薬系大学の各職域の薬剤師、研究者、教育者、学生などが、一堂に会して行われる学術大会で、毎年1,500～2,000名の参加があります。本フォーラムは、医療薬学に関する学術・研究の振興と推進に目標を置き、関連する基礎研究や臨床研究とその成果の応用に携わる部会員の研究発表、情報の交換、および国内外関連学協会との連携の場となっております。

今年度の「医療薬学フォーラム2014」では、臨床から発信する研究を中心に、「今求められるリバーストランスレーショナルリサーチの実践～臨床から基礎へ、そして臨床へ～」をメインテーマとし、特別講演1題、教育講演2題、シンポジウム15題、ワークショップ1題、ランチョンセミナー9題を企画いたしました。また、ポスター発表も300題強をご登録いただきました。ポスター発表では優秀ポスター賞も授与されます。

さて皆様は、「トランスレーショナルリサーチ」という言葉はよくご存じのところと思います。医学や薬学の基礎研究を臨床応用へとつなぐ橋渡しの研究とされています。今回のテーマはそれに「リバース」がついています。「リバース」には逆回り、逆転という意味があり、リバーストランスレーショナルリサーチは、副題にありますように、臨床で見つかった課題を基礎に戻り研究し解決法を見だし、それを臨床応用へとつなぐ一連の過程を指しています。リバーストランスレーショナルリサーチを通じて、病院や薬局の薬剤師の皆さんが日常業務のなかで遭遇した臨床上の課題を解決するために研究を行い、臨床に貢献するという流れを生み出すことは、日本薬学会医療薬科学部会が力を注いできた目標

の1つです。本フォーラムでは各種の講演やシンポジウムを通じて、臨床現場ではどのような課題が研究テーマとなり得るのか、どのように研究を進めればよいのか、研究費を獲得するにはどうするのか、研究結果を解析するための統計、大学との共同研究の進め方など、臨床現場の薬剤師の皆さんが「私にも研究ができそう！」とっていただけるような内容で構成致しました。

15題のシンポジウムをざっくりとテーマで分けると、「リバーストランスレーショナルリサーチ」「感染症」「漢方」「薬剤経済」「がん」「医薬品情報」「糖尿病」「6年制の卒業研究」「薬剤疫学」「地域薬局で行う研究」「トランスポーター」「院内製剤」「PK/PD」「研究倫理と研究費獲得」「若手研究者受賞講演」になります。たいへん幅広い領域を扱っていることに気付かれると思います。会場の都合で4つのシンポジウムが同時進行となります。興味があるシンポジウムの時間が重なっていることもあるかもしれませんがご了承ください。なお、特別講演と教育講演については、参加者全員にお聞きいただけるように1,000名収容できる会場を用意し、他のシンポジウムとは重ならないように配慮しました。

## ●シンポジウム・講演内容の紹介●

それでは具体的な企画についてご案内します。

まず第1日です。6月28日、初日の朝一番の特別講演は、今回のメインテーマである「リバーストランスレーショナルリサーチ」の言葉の生みの親ともいえる東京大学名誉教授、現・理化学研究所の杉山雄一先生による「創薬、臨床開発、医薬品適正使用におけるリバーストランスレーショナルリサーチ (rTR) の重要性」という講演です。特別講演に引き続き、東京大学医学部附属病院薬剤部長・教授の鈴木洋史先生がオーガナイザーで「薬学出身者に求められるリバーストランスレーショナルリサーチ」をテーマとするシンポジウムがあります。午前はこの他、慶應義塾大学薬学部・木津純子教授のオーガナイザーで「感染症治療の問題点とその克服」、昭和大学薬学部・鳥居塚和生教授のオーガナイザーによる「生薬・漢方薬に関する基礎研究から臨床研究への展開」、国際医療福祉大学・池田俊也教授のオーガナイザーによる「薬剤経済学を臨床で役立てるには」が並行して行われます。

午後には慶應義塾大学医学部・谷川原祐介教授のオーガナイザーによる「がん薬物治療に関する基礎ならびに臨床研究」があります。がんの薬物治療で遭遇する様々な課題を解決する研究の事例が発表されるので、がん専門薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師が研究を行う際のヒントがたくさん得られるものと思います。この他、東京大学大学院薬学系研究科・澤田康文教授のオーガナイザーによる「医薬品情報の基礎と臨床研究<思い出にひたり、今に怒って、将来へ提言する>」という刺激的なタイトルのシンポジウム、北里大学病院薬剤部長・厚田幸一郎教授のオーガナイザーによる「糖尿病治療に関する基礎ならびに臨床研究について」、武蔵野大学薬学部・伊藤清美教授のオーガナイザーによる「薬学教育6年制における卒業研究」が行われます。

午後のシンポジウム終了後、教育講演1として慶應義塾大学医学部長・末松誠教授から「がんの代謝システム制御～先端質量分析技術により明かされたあざとい生存戦略～」と

題する講演をいただきます。末松先生はメタボローム解析を用いた研究の第一人者であり、薬剤師よりも有機化学の重要性を理解されているといっても過言でない先生です。とても興味深いお話をいただけるものと思います。終了後は30分の移動時間を経て、メイン会場隣で懇親会となります。皆様にはぜひ懇親会にもご参加いただき学术交流を深めていただけますとうれしく思います。

続いて2日目、6月29日は午前東京理科大学薬学部・佐藤嗣道講師のオーガナイザーで「薬剤疫学：文献の批判的吟味と研究のヒント」、昭和大学薬学部・木内祐二教授のオーガナイザーで「地域薬局が担うこれからの臨床研究」、慶應義塾大学薬学部・中島恵美教授のオーガナイザーで「個別化医療におけるトランスポーター情報の活用」、星薬科大学・米持悦生教授のオーガナイザーで「半固形製剤を科学するー優れた院内製剤を創るためにー」の4題が行われます。

午後の1番目には、教育講演2として中央大学・大橋靖雄教授による「『統計』にだまされないために」が行われます。皆様ご存じのように大橋先生は今年3月まで東京大学で教授をお務めになられ、臨床統計学では日本を牽引してこられた先生です。難しい数式が登場する統計ではない、わかりやすいご講演がいただけるものと思います。午後は、昭和薬科大学・山崎浩史教授と日本大学薬学部・松本宣明教授のオーガナイザーによる「次世代の薬と定量化」、慶應義塾大学薬学部・黒川達夫教授のオーガナイザーによる「研究推進のためのインフラ整備ー研究倫理と研究費獲得ー」、東北大学大学院薬学研究科・立川正憲准教授、九州大学大学院薬学研究院・小柳悟准教授のオーガナイザーで、医療薬科学部会の若手研究者の集会である「次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム」での5名の受賞者による受賞講演があります。また、尾道市公立みつぎ総合病院・増田修三先生のオーガナイザーによる「静脈栄養療法をもう一度学びたい薬剤師のための輸液処方設計講座」がワークショップ形式で開催されます。その他、9題のランチョンセミナー、機器や書籍の展示なども開催します。

6月28日は8時50分に開会式、杉山先生の特別講演は9時からです。6月29日は9時開始、16時30分終了となっています。6月の東京は、梅雨の真っ最中ではございますが、2012年5月のスカイツリー開業、56年ぶりの2020年オリンピック・パラリンピック開催決定と東京は熱気にあふれております。東京お台場にて、おもてなしの心で、大勢の皆様の参加をお待ち申し上げます。